

檜本大進<プレミアム室内楽シリーズ> vol.1
シューマン&ブラームス 全曲ヴァイオリン・ソナタ・チクルス vol.1

檜本大進 & エリック・ル・サーージュ

Daishin Kashimoto & Eric Le Sage

2023年2月3日(金) 19:00 開演
サントリーホール

7:00p.m. Friday, February 3, 2023 at Suntory Hall

主催：ジャパン・アーツ

協力：ソニー・ミュージックジャパン インターナショナル



文化庁 子供文化芸術活動支援事業

Program

シューマン：ヴァイオリン・ソナタ 第1番 イ短調 Op.105

R. Schumann: Violin Sonata No.1 in A minor, Op.105

- 第1楽章：情熱的な表情をもって 1st Mov.: Mit leidenschaftlichem Ausdruck
第2楽章：アレグレット 2nd Mov.: Allegretto
第3楽章：生き生きと 3rd Mov.: Lebhaft

ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 Op.100

J. Brahms: Violin Sonata No.2 in A major, Op.100

- 第1楽章：アレグロ・アマービレ 1st Mov.: Allegro amabile
第2楽章：アンダンテ・トランクイロ—ヴィヴァーチェ 2nd Mov.: Andante tranquillo—Vivace
第3楽章：アレグレット・グラツィオーソ(クアジ・アンダンテ) 3rd Mov.: Allegretto grazioso (quasi Andante)

* * * * *

シューマン：ヴァイオリン・ソナタ 第3番 イ短調 WoO27

R. Schumann: Violin Sonata No.3 in A minor, WoO27

- 第1楽章：かなりゆっくりと — 生き生きと 1st Mov.: Ziemlich langsam—Lebhaft
第2楽章：スケルツォ、生き生きと 2nd Mov.: Scherzo. Lebhaft
第3楽章：間奏曲、動きをもって、しかし速くなりすぎず 3rd Mov.: Intermezzo. Bewegt, doch nicht zu schnell
第4楽章：フィナーレ、はっきりと、かなり活発なテンポで 4th Mov.: Finale. Markirtes, ziemlich lebhaftes Tempo

ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ 第3番 ニ短調 Op.108

J. Brahms: Violin Sonata No.3 in D minor, Op.108

- 第1楽章：アレグロ 1st Mov.: Allegro
第2楽章：アダージョ 2nd Mov.: Adagio
第3楽章：ウン・ポーコ・プレスト・エ・コン・センチメント 3rd Mov.: Un poco presto e con sentimento
第4楽章：プレスト・アジタート 4th Mov.: Presto agitato

榎本大進&エリック・ル・サーージュ 2023 日本公演

| | | | |
|----------|-----|-----------------|----------------------------------|
| 1月27日(金) | 福岡 | 福岡シンフォニーホール | 主催:テレQ 共催:(公財)アクロス福岡 |
| 1月28日(土) | 名古屋 | 愛知県芸術劇場コンサートホール | 主催:中京テレビ |
| 1月29日(日) | 所沢 | 所沢市民文化センターミュージズ | 主催:公益財団法人所沢市文化振興事業団 |
| 2月1日(水) | 大阪 | 住友生命いずみホール | 主催:住友生命いずみホール [一般財団法人住友生命福祉文化財団] |
| 2月3日(金) | 東京 | サントリーホール | 主催:ジャパン・アーツ |
| 2月4日(土) | 横浜 | 横浜みなとみらいホール | 主催:神奈川芸術協会 |

Profile

榎本 大進 (ヴァイオリン)

Daishin Kashimoto, Violin



© Keita Osada (Ossa Mondo A&D)

ロンドン生まれ。1990年、第4回パッサ・ジュニア音楽コンクールでの第1位を皮切りに、1996年のフリッツ・クライスラー、ロン＝ティボーの両国際音楽コンクールでの第1位など、5つの権威ある国際コンクールにて優勝。ドイツを拠点にソリストとして世界の舞台上で演奏する傍ら、2010年に正式就任したベルリン・フィルハーモニー管弦楽団第1コンサートマスターを務める。

3歳よりヴァイオリンを恵藤久美子に学ぶ。5歳でNYに転居し、7歳でジュリアード音楽院プレカレッジに入学、田中直子に師事。11歳の時、名教授ザハール・ブロンに招かれリューベックに留学。20歳よりフライブルク音楽院でライナー・クスマウルに師事、グスタフ・シュック賞を受賞し修士課程を修了した。

これまで、ロリン・マゼール、小澤征爾、マリス・ヤンソンス、チョン・ミョンフン、パーヴォ・ヤルヴィなどの著名指揮者のもと、国内外のオーケストラと共演を重ねるほか、室内楽にも意欲的に取り組み、マルタ・アルゲリッチ、ギドン・クレーメル、ユーリ・バシメット、ミッシェル・マイスキー、エマニュエル・パユ、ポール・メイエなどの著名ソリストと共演。使用楽器は、株式会社クリスコ(志村晶代表取締役)から貸与された1744年製デル・ジェス「ド・ベリオ」。

2007年からは、自身が音楽監督となって兵庫県赤穂市・姫路市を舞台に室内楽の国際音楽祭「ル・ポン(Le Pont)」を開始。フランス語で「架け橋」の意を持つ名前を冠した本音楽祭は、「音楽を架け橋に、人と人のきずなを大切に、平和で幸せな世界を創りたい」という榎本の願いを受けて開催され、彼の声がかけて世界一流の音楽家が毎秋参加し話題を呼んでいる。

2010年、日本人として史上2人目のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団第1コンサートマスターに正式就任。オーケストラの顔として活動しているほか、本拠地ベルリンでの定期演奏会やヨーロッパ、アジア・ツアーでの演奏会などでソリストとしても共演している。

主なCDは、2014年にワーナー・クラシックスから世界リリースもされた、コンスタンチン・リフシツとの「ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ全集」など。

1995年アリオン音楽賞、1997年出光音楽賞、モービル音楽賞、1998年新日鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞、平成9年度芸術選奨文部大臣新人賞、2011年兵庫県文化賞、チェンジメーカー2011クリエイター部門、2017年姫路市芸術文化大賞、ドイツに於いてはシュタインゲンベルガー賞、ダヴィドフ賞を受賞。2019年12月より、HiFiオーディオ製品ブランド「VELVET SOUND」(旭化成エレクトロニクス)公式アンバサダー。

TBS「情熱大陸」、NHK「プロフェッショナル～仕事の流儀」など、多くのメディアに取り上げられ、クラシック音楽の最高峰で活躍するヴァイオリニストとして常に注目を浴びている。

Profile



エリック・ル・サージュ (ピアノ)

Eric Le Sage, Piano

フレンチ・ピアノイズムの継承者として知られるエリック・ル・サージュは、繊細で趣のある音色、構成のセンス、詩的なフレーズで聴衆を魅了し続けている。

南仏のエクサン・プロヴァンス生まれ。パリ国立高等音楽院を17歳で卒業後、ロンドンでマリア・クルチオに師事。1985年ポルト国際コンクールおよび1989年ロベルト・シューマン国際コンクール

第1位、1990年リーズ国際ピアノ・コンクール第3位などの受賞歴を持つ。

ウィグモア・ホール、フィルハーモニー・ド・パリ、シャンゼリゼ劇場、アムステルダム・コンサートヘボウ、フランクフルト・アルテ・オーパー、ベルリン・フィルハーモニー、ブリュッセルのパレ・デ・ボザール、カーネギーホール、サントリーホールを含む著名コンサートホールでリサイタルおよび室内楽を行うほか、ロサンゼルス・フィル、フィラデルフィア管、トロント響、シュトゥットガルト放送響、ドレスデン・フィル、ベルリン・コンツェルトハウス管、トゥールーズ・キャピトル国立管、ロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管、ヨーロッパ室内管、ミュンヘン室内管、ロッテルダム・フィル、エーテポリ響、読響、都響を含む数々のオーケストラや、エド・デ・ワールト、ステファヌ・ドゥネーヴ、ファビアン・ガベル、ミシェル・ブラッソン、山田和樹、サー・サイモン・ラトル、ヤニック・ネゼ＝セガンをはじめとする著名指揮者と共演。また、シューベルトティアーデ、エディンバラ国際フェスティバル、ラ・ロック・ダンテロン国際ピアノ音楽祭等の国際音楽祭に招かれ出演している。

室内楽の名手としても名高く、エマニュエル・パユ(フルート)、ポール・メイエ(クラリネット)、榎本大進(ヴァイオリン)、リーズ・ベルト(ヴィオラ)、フランソワ・サルク(チェロ)、エベース弦楽四重奏団、レ・ヴァン・フランセ(木管アンサンブル)といったトップ奏者たちと共演を重ねている。また1993年にメイエ、パユ等と共にサロン・ド・プロヴァンス国際室内楽音楽祭を創設し、芸術監督を務めている。

シューマンのピアノ曲・室内楽作品全集(2010年ドイツ・レコード批評家賞受賞)、プーランク、フォーレ、ブラームスの室内楽作品全集、ベートーヴェン「最後の3つのソナタ」、ユリアン・プレガルティエンとの「シューマン: 詩人の恋」をはじめとする多数のCDをリリース。2022年にはソニー・クラシカルから1860～1946年のフランス作曲家によるピアノ小品集「空中庭園」をリリースした。

フライブルク音楽大学教授。

Program Notes

柴田 克彦 (音楽評論家)

Katsuhiko Shibata

シューマン: ヴァイオリン・ソナタ 第1番 イ短調 Op.105

ドイツ・ロマン派の先導者ロベルト・シューマン(1810-56)が残した3つのヴァイオリン・ソナタは、全て創作活動の終盤に書かれている。その内第1番と2番は、デュッセルドルフの音楽監督時代の1851年に続けて作曲された。創作のきっかけは、シューマンに当ジャンルの作品がないのを惜しんだ友人でヴァイオリン奏者ダーヴィト(メンデルスゾーンの協奏曲の協力者としても有名)の勧めによるとみられている。

第1番は、1851年9月12～16日の僅か5日で完成され、翌年3月ライプツィヒにて初演された。曲は、簡潔な書法の中に力強さとシューマンらしいロマン性を湛えた作品。純粹な緩徐楽章が置かれていない点、終楽章の最後に第1楽章第1主題を回想することで全体の統一が図られている点も特徴を成す。

第1楽章: 情熱的な表情をもって、憧れを秘めた第1主題と明朗な第2主題を軸に運ばれる情熱的な音楽。

第2楽章: アレグレット。変化に富んだ詩情豊かな楽章。へ長調の主要主題に短調の副主題が挟まれる。

第3楽章: 生き生きと。目まぐるしい動きを主体とした終曲。慌ただしい第1主題と柔らかなめの第2主題を中心に進み、力強く終結する。

ブラームス: ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 Op.100

ドイツ後期ロマン派の大家ヨハネス・ブラームス(1833-97)も3つのヴァイオリン・ソナタを残している。これらは1879～88年という創作活動の最盛期の所産。自己批判が強い彼は少なくとも4曲のソナタを破棄し、46歳になって第1番を世に出した。それゆえ発表された3曲は自信作であり、ドイツ・ロマン派を代表する名曲揃いだ。

ブラームスは、1886年からの3年間、スイスのトゥーン湖畔で夏を過ごし、週末には詩人ヴァイトマンのベルンの家を訪れて、新作等を披露した。従ってこの期間は、主に室内楽や歌曲が作られている。第2、3番のヴァイオリン・ソナタも同様で、第2番は滞在1年目の1886年に作曲され、同年12月ウィーンにて初演された。

本作は、当時恋愛感情を抱いていたアルト歌手シュピースの“到着を待ちながら”作曲されたという。それゆえ、第1楽章の第1主題は「早く来い」、第2主題は「調べのように私を」という彼女のために書いた歌曲の旋律が用いられている。トゥーン1年目は憂いのない日々だったこともあって、曲調は温かく優美。「ブラームスの中で最も旋律的な作品」とも称されている。

第1楽章:アレグロ・アマービレ(=愛らしく)。温和な第1主題は、ワーグナー「ニュルンベルクのマイスタージンガー」の「ワルターの賞歌」との類似性で知られる。第2主題は抒情的な旋律。

第2楽章:アンダンテ・トランクイロー・ヴィヴァーチェ。歌謡的な遅い部分と歯切れよい快速部分が交互に登場。緩徐楽章とスケルツォを兼ねた構成がなされている。

第3楽章:アレグレット・グラツィオーソ(クアジ・アンダンテ)。最低音弦のG線で奏される冒頭の主題を軸にした、幻想的な終曲。

シューマン: ヴァイオリン・ソナタ 第3番 イ短調 WoO27

1853年に名ヴァイオリニスト・ヨアヒムへ贈られた「F.A.E.ソナタ」に端を発した作品。同曲は、第1楽章を弟子ディートリヒ、第2、第4楽章をシューマン、第3楽章をブラームス(同年シューマン家を訪問し、世に出るきっかけを与えてもらった)が作曲した合作ソナタで、F.A.E.はヨアヒムのモットー「Frei aber einsam=自由だが孤独に」の頭文字を意味し、各楽章はF・A・E(ヘ・イ・ホ)音を基本動機としている。そしてシューマンは、直後に自作以外の楽章も作曲し、先の2つの楽章を第3、4楽章とする新ソナタを完成した。だが精神を病んでライン河に身を投げる(未遂)前年に書かれた本作は、日の目を見ることなく、没後100年の1956年ようやく第3番として出版された。

曲は、情熱や力感を内包した幻想的な音楽で、断片的な動きの多さも特徴。なお近年は第2、第3楽章を入れ替えるケースが多いが、今回はオリジナルの形で演奏される。

第1楽章:かなりゆっくりと一生き生きと。ドラマティックな序奏に、細かな主題や流麗な主題等が自由に移ろう主部が続く。

第2楽章:スケルツォ、生き生きと。激烈に始まる幻想的な音楽。

第3楽章:間奏曲、動きをもって、しかし速くなりすぎずに。切なさが漂う美しく短い楽章。

第4楽章:フィナーレ、はっきりと、かなり活発なテンポで。対照的な2つの主題に様々な動きが加わる力強い終曲。

ブラームス: ヴァイオリン・ソナタ 第3番 ニ短調 Op.108

1886年、トゥーン湖畔で第2番と同時に着想され、1888年に完成された作品。ベルンで私的初演後、同年12月ブダペストにて公開初演された。曲は、親友の死や病気の報が相次いだ当時の心象を反映すると同時に、優美な第2番との対照性も企図された、激情的な性格を持つ音楽。短調の基調と4楽章の構成が他の2曲とは異なり、大ピアニスト、ビューローへの献呈を前提に書かれたことから、ピアノ・パートの難しさも際立っている。また、ブラームスが終生思慕の情を寄せた、恩人シューマンの妻で名ピアニスト、クララへの手紙に「貴女の指の下で夢見るように弾かれることは、とても心地よく、心が和む」と記し、彼女も「滅多に経験できない純粋な喜び。各楽章が口では言えないくらい好き」と返すなど、2人の心の交信を内包した曲でもある。

第1楽章:アレグロ。哀感を湛えた第1主題に始まり、すぐに激しく進行。表情豊かな第2主題が続く。展開部ではピアノの低音がイ音(精神を病んだシューマンの頭の中で鳴り続けたといわれる音)を奏し続ける。

第2楽章:アダージョ。冒頭に最低音弦のG線で弾かれる甘美な歌を中心とした、ニ長調の緩徐楽章。

第3楽章:ウン・ポーコ・プレスト・エ・コン・センチメント。憂いを帯びた短いスケルツォ。

第4楽章:プレスト・アジタート。決然たる主題とコラル風長調主題を軸に展開される情熱的な終曲。
